

Title	環太平洋の平和的發展と共有宗教文化 : オーストラリアの四つの事例
Author(s)	濱田, 陽
Citation	宗教と社会貢献. 2014, 4(1), p. 27-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27463
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

環太平洋の平和的發展と共有宗教文化

—オーストラリアの四つの事例—

濱田 陽*

Common Religious Culture for the Peaceful Development in Asia and the Pacific

Four Cases in Australia

HAMADA Yo

論文要旨

本論文は「共有宗教文化」の観点から、1 オーストラリア・サルベーション・アーミーが130年以上の歴史のなかで培った社会的信頼、2 オーストラリア国際連盟協会によるキリスト教社会事業家・賀川豊彦の招聘（1935年3-5月）、3 メルボルン博物館による歴史的スラム地区・リトルロンの発掘調査と展示、4 アボリジニの人々の宗教文化を取り上げ、宗教の社会貢献の可能性を論じる。また、環太平洋の平和的發展のため、多様な宗教文化が有する精神的、物質的資本を総合的視野で生かすための示唆的知見を得ることを目的としている。

キーワード 共有宗教文化、救世軍、賀川豊彦、博物館、アボリジニ

This article focuses on the four interesting cases in Australia through the aspect of common religious culture.: 1.Social trust the Australian Salvation Army has gotten for more than 130 years history, 2.Invitation of Tokyohiko Kagawa, the Japanese Christian leader and social entrepreneur, by the Australian League of Nations Union (May to March in 1935), 3.Archeological research and the exhibition of the historical large slum area by Melbourne Museum, 4.Religious culture of Aboriginal people. The aim is to discuss about the possibilities of social contributions of religions from new points of views and to some reflections. The concept of common religious culture would be useful to use the spiritual and physical capitals comprehensively for the peaceful development in Asia and the Pacific.

Keywords: common religious culture, Salvation Army, Toyohiko Kagawa, Museum, Aboriginal People

* 帝京大学文学部・准教授・yo_hamada@hotmail.com

1. 共有宗教文化論の射程とオーストラリア

1.1 共有宗教文化という研究アプローチ

信仰が異なっても、無宗教の立場であっても共有できる宗教文化。それを「共有宗教文化」(common religious culture)と呼ぶことにしたい。逆にいえば、信仰が異なっている、無宗教の立場の人からも、受け入れられる宗教文化が、共有宗教文化である。

ここで、宗教文化を、ある宗教に根ざす生活様式とそれによる形成物群とすれば、共有宗教文化には、宗教文化のうち、その宗教を越えて共有できる、精神的、物質的資源が広く含まれるといえる。

共有宗教文化という観点から、世界の宗教文化を見渡せば、事例は無数に挙げられるであろう。一般の人々が参加できる日本の神道の多くの祭りや、キリスト教のクリスマス、無宗教者によるキリスト教式結婚式、ムスリム(イスラーム教徒)以外の人々が観光誘致やビジネスのために理解し、受け入れるハラール(イスラームで禁止されている慣習)に基づく食品の知識、また、貴重な芸術作品でもある宗教の彫像、絵画、建築物、そして、宗教的信念に根ざし、信仰の違いを超えて社会の福祉に貢献する宗教の社会貢献活動の実践も、共有宗教文化に含めて考えたい。

もちろん、宗教文化には、宗教的立場を越えて共有できない内容があり、そちらの方が宗教文化にとってより本質的であるといえる場合が多い。

たとえば、カトリックのキリスト教の結婚式では、パンとワインによって象徴的にキリストの聖体を拝領するミサは、キリスト教徒でない新郎新婦には執り行われぬ。しかし、新郎新婦には、そのことは、はっきりとは示されず、ミサの意味を理解されることも難しい。

また、ムスリムでなければ、聖地メッカに巡礼することはできない。聖地メッカはこの意味では、共有宗教文化とはいえない。他方、エルサレムの黄金のドームには、ムスリムでなくても入ることができる。黄金のドームは共有宗教文化としての性格が強いといえる。

日本の神道にもメッカのように共有から遠い宗教文化がある。伊勢神宮内宮の正殿には、宗教が異なる者や無宗教の者のみならず、神道的信仰の自覚者でも、立ち入ることはゆるされていない。ここから先は進めない

いう領域、禁域が、それ以外の多くの神社にも存在している。

共有しがたい宗教文化は、専有宗教文化と呼んでもよいかもしれない。ある宗教において信仰や宗教的修練上の一定資格を有する者のみが専身的に関わることが許される、そのような宗教文化である。こうした、専有宗教文化が、宗教文化のもっとも核心的な内容を構成していることが多い。したがって、専有宗教文化に比べると、共有宗教文化は、宗教文化のなかでも、さほど重要性が認識されにくい傾向にあるのではないだろうか。

しかしながら、共有宗教文化は、諸宗教及び世俗領域が相互に関わりをもつことができるインターフェイス（接触面）として存在し、人々が意識するとしないと関わらず、各宗教各宗派、及び、世俗的立場の共存状況を維持する上で、きわめて大きな役割を担っていると思われる。なぜなら、こうした共有宗教文化が存在していなければ、諸宗教と世俗領域は、宗教間及び宗教・世俗間で、摩擦や衝突を生じさせたり、無関心を助長させたりすることになるからである。

筆者は、無自覚的に共有が成立している、あるいは、成立しているかにみえる宗教文化についても、その共有の様相を分析し、意識化することが重要であると考え。それにより、諸宗教・世俗領域の共存のインターフェイスとして、共有宗教文化の評価し、その可能性を生かしていく方向性を見つけないためだ。相互の無関心の上に成立しているだけでは、共有宗教文化を育てることには限界がある。

さらにいえば、宗教間対話も、長期的には、この共有宗教文化の存在があつてこそ、真価を発揮できるのではないだろうか。そうでなければ、各宗教の核心的な内容の主張や比較のみでは、共有可能な考え方や実践を見いだせないことになってしまう。

共有宗教文化の意義を理解し、その潜在的機能を生かすことができれば、諸宗教の有する精神的、物質的資源を有効に活用できるばかりか、諸宗教・世俗間の相互理解、相互交流を無理なく進めることが可能になるだろう。

一見、共有が困難に見え、逆に、共有が容易に見える宗教文化のうち、じっさいに何が共有でき、何が共有できないのか、相互理解を深める過程で、共に可能な実践は何かを、より正しく認識することができるようになるだろう。

以上の意味での共有宗教文化に関する研究を、共有宗教文化論と呼びた

い。

共有宗教文化は、共有を柱としている。筆者は、共有概念についても考察を重ねてきている [濱田 2011a, 2011b, 2012, 2013]。また、共有宗教文化と専有宗教文化の関係についても、多くの課題があることを論じている [同 2014]。筆者の考えでは、共有の観点から、宗教文化を再考することが、グローバル化した今日の世界において、重要度を増している。

たとえば、宗教の社会貢献も、それが、宗教の違いを越えて受け入れられ、共有されることによって、持続的な貢献と成長が可能になるだろう。

1.2 オープンな宗教文化資本として

ここでは、共有概念の込み入った議論に立ち入ることはしないが、宗教の社会貢献との関係から、次のことを主張しておきたい。

宗教の社会貢献をふくむ共有宗教文化は、一つの宗教の信者の共同体やネットワークを越えて、他の宗教の信者や無宗教の者にもプラスの効果をもたらすことができる。すなわち、その宗教の信者にとっての益を越え、開かれた精神的、物質的充足を一般社会にもたらすことができる。

その意味で、共有宗教文化は、宗教文化が、一つの宗教の枠を越えて、開かれた社会貢献をもたらす精神文化的、物質文化的資源であり、「オープンな宗教文化資本」(Open Religio-Cultural Capital) であるといっていだろう。

たとえば、神社が、祭りや保育、環境保護活動のために宗教的立場の異なる人々が集う場になりうるとき、それは、オープンな宗教文化資本であり、ソーシャル・キャピタルを生成させる資本であるととらえることができるだろう。神社がソーシャル・キャピタルなのではなく、その前段階の、ソーシャル・キャピタル生成の源なのである。

この神社の機能を理解するためには、ソーシャル・キャピタルのみならず、共有宗教文化としての性質そのものに着目して、分析しなければならないだろう。人々が、無意識のうちに、神社において共有できているのはなにか、その非言語的な心象、行為、経験のきめ細かな様相を、言語化し、理解することが必要になる。そこには、意識化されていないけれども、共有されている経験、時間、空間がある。

神道の氏子・崇敬者の立場からは、それは「神」や「ご神徳」であり、

無宗教や他の宗教の立場からは、神社の空間の非日常性や自然の豊かさ、厳かさ、居心地の良さ、集まってくる人々の期待感、心根の良さであったりするだろう。主観的には、そこに集まる人によって、意識が異なりながらも、それでも、神社における空間と時間が、多数の宗教的立場の異なる人々に共有されている。

この場合、神社は、神道の神・自然・歴史・神主・氏子・一般人等の総体が関係する場であり、共有宗教文化として、オープンなソーシャル・キャピタルを生み出す契機になっているのである。

また、スペインのバルセロナにあるモンセラート修道院の黒のマリアは、その修道院でもっとも大切な聖母子像であるが、宗教が異なっても、無宗教であっても、接近し、手でふれることができる。

キリスト教の信者と、そうでない場合とでは、黒のマリアにふれる主観的な意味は異なっている。キリスト教の信者、とくにカトリックの場合、救い主の聖母の聖なる身体にふれる感覚であるだろう。しかし、キリスト教の信者でない場合、聖母子像にふれようと列をなして居並ぶ人々に押されながら、よくわからないまま、何か聖なるものにふれて、ぼうっとなって気がつく、列に押されて後ろの人に場を譲っている。けれども、自分も、カトリックの信者とともにその像にふれたという体験は残る。この経験には、深い意義があると筆者は考える。

カトリック信者と、信者でない者という双方の立場から、黒のマリアに巡礼し、ふれる行為を理解し、主観的な意味を異にししながら、共通の経験が成立していることの意義を、考察することができる。それは、他の宗教の信者や無宗教者がカトリックの信者になったりすることとは違って、お互いが信仰では歩み寄れないなかでも、相互理解にとって意義ある経験が、その場と時間で、成立していることを意味している。

カトリックの側からすれば、信者が得られずとも、一定の理解者が得られる。その体験が、その者に良い印象を残す、忘れがたい体験であるかぎり、その者はカトリックの共感者（シンパサイザー *sympathizer*）となってくれる可能性がある。カトリック信者でない者の側からも、自分の宗教的信条の独立を維持しながら、カトリックの宗教文化に、限定的に接することができたと感じることが可能である。それが、一時的なもので、その場を離れ、自分の生活世界に戻るのもであっても、その体験の感触は残り続け

る場合が少なくないのではないだろうか。

共有宗教文化には、どのような事例があり、どのような可能性をもっているのか、探求していくことは重要である。それではなければ、宗教と社会の関係に相互不信などの不安定な状況をまねくことにもなりかねない。宗教文化に対して無関心や無理解が増大していけば、いくら善意の努力を重ねても、宗教文化がもつ豊かな精神的、物質的資源を、社会に役立たせることは困難になってしまうだろう。

したがって、共有宗教文化は、オープンな宗教文化資本である。そして、このオープンな宗教文化資本が、一つの宗教の枠を越えて、人々のつながりの信頼、ネットワーク、規範の蓄積をもたらすとき、すなわち、ソーシャル・キャピタル (social capital 社会関係資本) をもたらすとき、それは、ソーシャル・キャピタルを生成させる源となる資本 (original capital 本源的資本) とみなすことができよう。

1.3 オーストラリアの宗教統計

共有宗教文化は、日本及び世界の諸宗教文化において広く見出し、研究対象とすることが可能であるが、以下では、共有宗教文化論の観点からオーストラリアの四つの事例を考察する。

オーストラリアでなく日本を研究活動の拠点とし、また、オーストラリア地域研究の専門家でもない筆者が、オーストラリアの事例を取り上げる理由は、第一に、環太平洋の平和的発展のために宗教 NGO と宗教文化がどのような役割を担う可能性があるのかを省察するためであり、第二に、宗教の社会貢献活動の共有のために日本社会に不足していると思われる視点や認識が、オーストラリア社会に発見できるためである。

まず、オーストラリアの人口と宗教の関係を、オーストラリア統計局による人口調査 (Census) から見渡してみよう。

1901年から2001年まで、オーストラリアの人口は377万3千800人から1876万9千200人に増加した。宗教比率は、1901年にキリスト教96.1%、他宗教1.4%、無宗教 (No religion) 0.4%、無回答・不適切回答による不明2.0%であったが、2001年には、キリスト教68.0%、他宗教4.9%、無宗教15.5%、不明11.7%となっている [Justin ed. 2004: 1]。

100年で人口はほぼ5倍になったが、キリスト教比率は9割以上から7割

弱に低下、無宗教・不明は2割5分を超えている。

国勢調査は、5年毎に行われ、最新の2011年調査では人口2150万7千700人、宗教比率は、キリスト教61.1%、他宗教7.2%、無宗教22.3%、不明9.4%となっている。つまり、10年後、キリスト教の比率が7割弱からさらに6割余りに低下、無宗教・不明が増えて3割を超え、他宗教が存在感を見せて7%となっている。

この変化を、より詳しく、キリスト教の教派別・諸宗教別に見てみよう。

1901年にはキリスト教は、英国国教会39.7%、カトリック22.7%、その他キリスト教33.7%であった。それが、2001年には、カトリック26.6%、英国国教会20.7%、その他キリスト教20.6%となり、カトリックが伸びて英国国教会を上回ったことが特徴的であるが、全体としてキリスト教比率は低下している。

そして、2001年では、その他キリスト教の内訳は、合同教会6.7%、プレスビテリアンと改革派3.4%、正教会2.8%、バプテスト教会1.6%、ルター派1.3%、ペンテコステ派1.0%、サルベーション・アーミー(救世軍)0.4%、エホバの証人0.4%、キリストの教会0.3%、その他キリスト教徒2.7%であった。また、同年の他宗教の比率は、仏教1.9%、イスラーム1.5%、ヒンドゥー教0.5%、ユダヤ教0.4%、その他宗教0.5%であった。つまり、キリスト教でも英国国教会、カトリック以外の教派では、教勢は1割に満たず、それだけ他宗教が相対的に目立つ存在になったといえよう。

それが、2011年には、カトリック25.3%、英国国教会17.1%、その他キリスト教15.9%となった。

そして、その他キリスト教の内訳は、合同教会5.0%、プレスビテリアンと改革派2.8%、正教会2.6%、バプテスト教会1.6%、ルター派1.2%、ペンテコステ派1.1%、エホバの証人0.4%、セブンスデー・アドベンチスト0.3%、サルベーション・アーミー(救世軍)0.3%、モルモン教徒0.3%、その他プロテスタント0.3%であった。また、他宗教の比率は、仏教2.5%、イスラーム2.2%、ヒンドゥー教1.3%、ユダヤ教0.5%、シーク教徒0.3%であった。

すなわち、20世紀の100年間でカトリックは英国国教会を上回って最大宗派となったが、21世紀に入って10年間の変化を見ると、そのカトリックを含めてキリスト教はほとんどの教派で比率を下げており、仏教、イスラ

ーム、ヒンドゥー教、ユダヤ教など他宗教が少しずつであるが着実に比率を上げている。110年間の流れは、キリスト教比率の低下、無宗教・不明比率の急激な上昇、他宗教の着実な漸増であるといえる。

縮言すれば、21世紀に入り10年が経過したオーストラリア社会は、5人集まれば3人がキリスト教徒であるが1人は自覚的な無宗教で、10人集まれば宗教的立場が不明の者が1人は含まれ、15人集まれば他宗教者が1人は含まれるという、キリスト教・無宗教・他宗教が入り混じった社会になっている。

1.4 オーストラリアの宗教 NGO

オーストラリアにおいても、宗教 NGO（宗教系非政府組織 *religious non-governmental organization*）、ないし、信仰を基盤とする組織（*FBOs: Faith-based organizations*）はきわめて多分野に渡っており、筆者の見るところ、全体を外観できる統計は整備されていない。そこで、政府機関であるオーストラリア開発庁（*AusAID: Australian Agency for International Development*）のために、オーストラリアの社会人類学者がまとめた研究レポート「宗教と開発 オーストラリアの信仰に基づいた開発組織」を参照しておきたい [Hoffstaedter 2011]。

オーストラリア国際開発協議会（*ACFID: The Australian Council for International Development*）は、国際支援と開発の分野で活動するオーストラリアの NGO を対象とした代表的な協議会といわれる。2011年時点で *AFCID* 加盟 NGO は 70 団体以上で、合わせて世界 100 カ国以上の発展途上国で活動している。

その内訳は、非宗教・宗教別で、世俗 62%、キリスト教（プロテスタント）23%、カトリック 10%、英国国教会 2%、ムスリム 1%、その他宗教 2% で、団体数別では、世俗 NGO が多く 6 割を占め、プロテスタントが 2 割強、カトリックが 1 割である。

これを宗教 NGO だけで見ると、宗教 NGO は 20 団体以上で、キリスト教（プロテスタント）61%、カトリック 25%、英国国教会 6%、ムスリム 2%、その他宗教 6% の比率となる。

国際支援と開発分野におけるオーストラリア最大の宗教 NGO は、プロテスタント系のワールドビジョンであり、2009 年度歳入は約 3 億 5 千万豪ド

ル、そのうち 2 億豪ドル以上がチャイルド・スポンサーシップからの収入となっている。

AusAID からの NGO 補助金は、この研究レポートから明らかな 2003-2004 年度で 9 千 500 万豪ドル以下にとどまり、その 3 分の 1 (3 千 200 万豪ドル超) が宗教 NGO に充当されている。

補助金支出の内訳は、世俗 NGO が 66.08%、ワールドビジョン 16.87%、アドベンチスト開発・救援局 (アドラ ADRA) 3.47%、クリスチャン・ブラインド・ミッション (CBM) 2.53%、カトリック系カリタス・オーストラリア 2.16%、アジア太平洋の人民のためのオーストラリア財団(AFAP)2.09%、以下、2%未満が 9 団体となっている。

国際支援と開発の分野で、多様な宗教 NGO が活動しているが、世俗 NGO の約 3 分の 1 で、ワールドビジョン以外では財政規模が小さいことが分かる。

2. オーストラリアの四つの事例

2.1 オーストラリア・サルベーション・アーミーが培った社会的信頼

ここで照明を当てるサルベーション・アーミーは、ワールドビジョンとは逆に、オーストラリア国内の社会事業を中心に展開している。サルベーション・アーミー (Salvation Army) はイギリスでウィリアム・ブース、キャサリン・ブース夫妻によって 1865 年に創立されたキリスト教団体で、現在、世界 124 の国と地域で 165 万人のメンバーが活動しているといわれる。

とくに、オーストラリアでは、サルベーション・アーミーは、支部を設けた 1880 年から 130 年以上の歴史があり、継続して社会貢献活動に携わってきている。そのサルベーション・アーミーの財政規模は、国際支援と開発に関わるワールドビジョンとほぼ匹敵している。

サルベーション・アーミーも宗教人口比率は意外に低い。しかも、第二次世界大戦後の推移を見ると、1947 年 0.6%、1961 年 0.5%、1971 年 0.5%、1981 年 0.5%、1991 年 0.4%、2001 年 0.4%、2011 年 0.3%と半減している。しかし、2011 年時点で信徒数 6 万 163 人が、社会福祉にきわめて高い意識を持ってオーストラリア社会にコミットしていることを考えると、その影

響力は、人口比率からは測れないレベルに及んでいるといえる。



写真 1：サルベーション・アーミー・シドニー本部外観、2013 年 3 月筆者撮影（以下同様）

オーストラリアにおけるサルベーション・アーミーの認知度と信頼性はきわめて高いと判断することができる。それは、サルベーション・アーミーが、オーストラリアを代表する成功組織として有名企業とともに経営戦略論（Strategic Management）の研究対象に挙げられている事実からもうかがい知ることができる。

この分野の専門家グラハム・ハバード（現アデレード経営大学院長）が中心となり、メルボルン大学経営大学院メルボルン・ビジネススクールがまとめた『オーストラリア最高の勝ち続けるイレブンの組織』（未邦訳 2002, 改訂版 2007）は、オーストラリアで最高の持続的成功を収めている 11 組織を分析した研究成果である。

そこに、オーストラリアを代表する世界的企業として、世界大手の木製パレット（荷台）企業ブランブルズ、大手家電量販店ハービー・ノーマン、都市開発業者レンドリース、投資銀行マッコーリー・バンク、オーストラリア国立銀行、カンタス航空、通信会社テルストラ（Telstra）、不動産開発・小売業のウェストフィールド（Westfield）、資源企業リオ・ティント、小売業のウールワース（Woolworths）と共に、サルベージン・アーミーが分析対象として挙げられている。

この 11 組織の選別は、ハバートを含め 4 人の専門家が 3 年をかけ、1000 人のオーストラリア人 CEO にインタビューし、アニュアルレポートと株式などを分析した結果である。

状況変化への迅速な適応能力、内部リーダーを成長させる献身、企業・組織文化に適する人間の雇用、リスクへの備え、失敗に学ぶ意志などが、中には 100 年以上の成功を収めてきている企業や組織から抽出できる、とハバードたちは分析している。また、これらの組織は、自分自身を改善可能な存在とみており、それは文化的な性格ともいえ、成功組織は、変化することを念頭に置いているという。さらに、被雇用者を大きな目標の達成に挑戦させるより、大義に向かう情熱を醸成している、としている。

サルベージン・アーミーの公式ホームページによれば、オーストラリアで 8500 名以上の職員とスタッフが雇用され、1000 以上の社会プログラムを実践し、毎年 100 万人以上のオーストラリア人が何らかの支援を受けている。

2011 年度収入は約 3 億 3400 万豪ドルで、政府補助金 47%、商業収入 26%、義捐金・その他寄付金 15%、居住者貢献 4%、投資収入 4%、遺産等 1%、その他収入 3%となっている。

予算規模は、2010-2011 会計年度 3 億 100 万豪ドルで、2011 年度の支出内訳は、救世軍店舗 24%、ホームレス・家庭内暴力支援 17%、雇用・教育・訓練 15%、個人・家庭支援 13%、子供・若者のリスクケア 12%、高齢者・障がい者への奉仕 8%、薬物・アルコール中毒者支援 7%、組織運営・調査 4%であり、これに年間募金運動等の支出約 2300 万豪ドルを加え、2011 年度の支出は約 3 億 2400 万豪ドルである。

一週間の活動単位では、食事支援 10 万食、ホームレスのために 2 千床、食券 5-8 千枚を準備し、新たに被虐待者 500 名の避難所となり、新たに薬

物・アルコール・ギャンブル依存者 500 名の生活改善をアシストし、数千人にカウンセリングを提供し、高齢者 3 千人にケアサービスをし、裁判でのチャプレンのサービスを千人に届け、40 家族に捜索支援をしている。

2013 年 3 月の筆者の現地調査でも、シドニー本部の日曜礼拝において、最近に亡くなった隊員への追悼式、世界のサルベージン・アーミーの活動報告も合わせて行われ、老若男女で構成されるブラスバンドと合唱が加わって、隊員たちの結束を高める充実した集会が行われている印象を受けた。



写真 2・3：同シドニー本部ホールにおける日曜礼拝の様子とその後の隊員たちの交流

また、シドニー本部の隊員、首都キャンベラ支部の隊員から、アルコール依存症が依然として大きな社会問題とであること、シングルマザーの貧困、アボリジニの生活困窮者への支援などが課題であるという認識を聞くことができた。

また、キャンベラ支部の隊員からは、英語教育の一貫としてアボリジニの居住区を訪れ、子供たちに聖書を教える活動もしているが、入信を無理に勧めようとするものではないという意見を聞いた。



写真 4：サルベーション・アーミー・キャンベラ支部

サルベーション・アーミーのストアは、シドニーもダーウィンも、明るく開放的な雰囲気であり、隊員服や楽団の楽譜、音楽 CD が販売され、また、通常の婦人服から、貧困者のための日用雑貨、リサイクル衣料、中古書籍等を扱っている店など、小規模ながら店舗によって特徴をもっている。



写真 5・6：ダーウィン郊外のサルベーション・アーミー・ストア



写真 7：ダーウィン市内のサルベーション・アーミー、レッド・シールド・ホステル

多くの宗教 NGO の活動と同様、サルベーション・アーミーの社会的サービスも、宗派・宗教が異なり、無宗教であっても受けることができる。しかも、その活動は、行政や世俗 NGO とは異なり、宗教的信念を基盤としている。

以上から、サルベーション・アーミーの存在と社会貢献活動は、筆者が考える共有宗教文化といえる。宗教人口比率では 0.3% にすぎないが、キリスト教の他教派、無宗教、他宗教の人々に、社会的信頼を得て、広く受け入れられているからである。

さらに、サルベーション・アーミーが、歴史的存在としても自然なかたちでオーストラリア社会に受け入れられていることが、南半球最大規模の博物館であるメルボルン博物館において、100 年以上前の宣教活動の様子が展示紹介されていることからもうかがえる。



写真 8：メルボルン博物館におけるサルベーション・アーミーのライムライトによる布教活動展示

その展示は、同博物館でメルボルンの歴史を紹介する常設展「ザ・メルボルン・ストーリー」（2008 年 3 月開設）の一角にある。1890 年代、サルベーション・アーミーがマジック・ランタン技術の先駆者であったこと、1898 年にオーストラリアで最初の映像スタジオを設置し、「十字架の兵士」（Soldiers of the Cross）などの屋外ショーをメルボルン市の夜の街路で、歌や楽団付きで行い、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてキリスト教の価値をユニークな方法で人々に伝えていたことが当時の映写機などの歴史的資料

とともに、ライムライト映像の自動実演をまじえて紹介されている。

サルベーション・アーミーが、キリスト教精神の伝道者、社会福祉の担い手であるだけでなく、時代を先駆ける文化の先駆者でもあることを感じさせる印象深い展示といえる。

日本社会においては、伝統仏教や神道は、サルベーション・アーミーのように、社会的サービスに力をいれる組織としては認知されていない。しかも、宗教 NGO が、トヨタなど日本を代表する企業と肩を並べて経営戦略が分析されるなども、想像しがたいだろう。

しかしながら、もし、オーストラリアのサルベーション・アーミーのような宗教 NGO が日本にもあれば、宗教の社会貢献についても、一般社会からの理解がもっと深まるのではないかと推測する。

サルベーション・アーミーの存在は、オーストラリアにおいて宗教 NGO 自体への社会的信頼と認知度を高めているといえるのではないだろうか。

2.2 オーストラリア国際連盟協会による日本のキリスト教社会事業家・賀川豊彦の招聘（1935年3-5月）

ところが、宗教的信念にもとづく活動が社会問題に取り組む力を考える際、オーストラリア社会が、日本の一宗教者の活動に高い関心を示した時代があったという史実を欠かすことはできない。

1931年の満州事変、1933年の日本の国際連盟脱退など、日本が国際社会から孤立していく流れの中で、メルボルン入植 100 周年記念行事などのためオーストラリア国際連盟協会から招聘され、2ヶ月に渡ってオーストラリア各地を巡回したキリスト教社会事業家・賀川豊彦（1888-1960）の事例である。

賀川は、1935年3月12日から5月18日まで、ブリスベン、シドニー、キャンベラ、メルボルン、アデレードなどオーストラリア各都市とタスマニア島を訪問し、67日間で計178回講演し、その聴衆は11万5千人に上ったという [Topping ed. 1936 : 31] [賀川 1963(1938): 474]。

オーストラリアの賀川豊彦の記録は、まだ本格的な研究はなく分析もなされていないが、オーストラリア国立図書館の新聞検索データベースでは、賀川が訪問した1935年だけで、Dr. Kagawa のキーワードで720件の記事がヒットする。アクセスが可能な2007年までに1091件の記事が検索できる。

同時代の日本人として、欧米圏のみならず、オーストラリアにおいても、もっとも著名な宗教的人物だったことは、ほぼまちがいないだろう。

日本が国際連盟を脱退した時代に、一民間人としてオーストラリア国際連盟協会に招かれ、社会的な感化を与えたことは、決して小さなことではない。

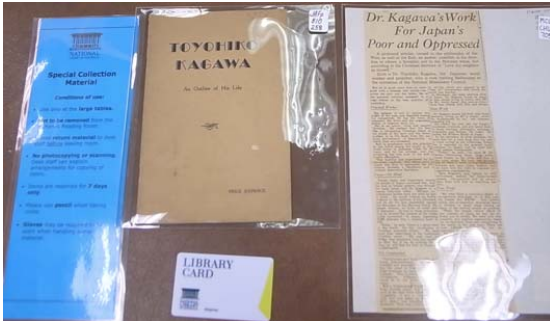


写真 9 : オーストラリア国立公文書館所蔵・賀川豊彦関係資料の一部

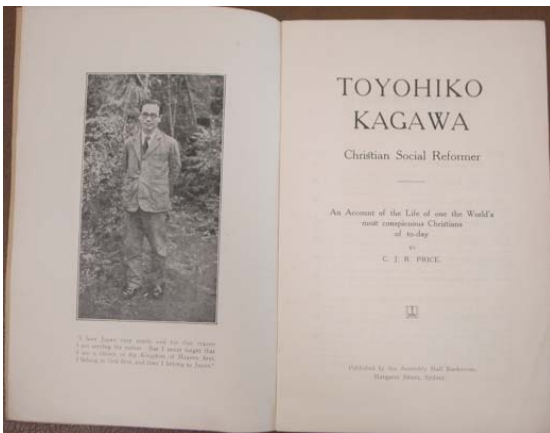


写真 10 : 同資料中、1935 年、シドニーで出版された賀川豊彦を紹介するブックレット

賀川は、自由な協同のアソシエーション（つながり）としての協同組合、及びそれに準じる経済体制のマイクロ及び国際レベルの実践によって、近代化にともなって深刻度を深めるスラム化、地域社会崩壊、経済摩擦、社会不安の増大、軍国主義などの社会問題を漸進的に改善していこうとするア

アイデアをもち、その信念の根底に、自身のキリスト教信仰を置いていた。

賀川においては、協同組合の理論、システムを支える哲学の核心部分に宗教的信念が関わっていた。

**DR. TOYOHICO
KAGAWA**

**A GREAT JAPANESE
LEADER.**

By FRANCIS J. SULLIVAN

Dr. Kagawa arrived in Brisbane on Tuesday, and he will be in Melbourne on April 26. He will be the guest of the National Missionary Council of Australia. Described as the "greatest saint and the greatest statesman in the Far East to-day," Dr. Kagawa is one of the most remarkable personalities in the world.

AUTHOR, poet, economist, social worker, philosopher, Labour leader, and Christian, Dr. Toyohiko Kagawa is one of the most famous personalities in Japan, a prophet who is honoured in his own country. A man of contradictions, he has spent his life in the service of the poor, the sick, and the needy. Pioneer of labour movements in town and country, a practical mystic, a socialist when the very word was anathema, a fighting pacifist, a Christian leader in a Buddhist land, a statesman without office, but respected by friend and foe.



Dr. KAGAWA

図1 賀川豊彦を紹介する新聞記事の一例 出典：1935年3月16日付 *The Argus* 紙（オーストラリア、メルボルン）。オーストラリア国立図書館 Trove による検索では、賀川がオーストラリアを訪問した1935年だけで長短合わせ172の記事を見ることができる。

オーストラリアの賀川の講演テーマは多岐にわたるが、とくに国際連盟協会主催で、1935年4月29日にメルボルン市庁舎で行った講演のテーマは「太平洋の平和」(Peace in the Pacific)であった [Topping ed. 1936: 10-18]。そこで、賀川は、世界及び、オーストラリアを含めた太平洋の人種問題、宗教問題、経済問題に言及し、なかでも経済問題をもっとも深刻な戦争の要因として指摘し、国際的な協同組合システムや搾取のない経済の構築によって世界平和を追求するべきであると説いている。

賀川豊彦のキリスト教精神にもとづいた協同組合の発想が感化を与えた、もっとも知られた事例としては、フレッチャー・ジョーンズによる事業展開が挙げられる。熱心な青年実業家であったジョーンズは、1935年に賀川をワーナランブール市に招いて講演会を開いている。1936年には、日本を5ヶ月間訪問し、賀川の社会事業を実地に研究し、薫陶を直接受けている。オーストラリアに戻ると、ジョーンズは、自身のアパレル会社を、労働者所有の協同組合式経営に切り替えて、斬新な経営手法で成功を収め、国内に55店舗を展開、2750名を雇用するなど、オーストラリアを代表するアパレル企業と呼ばれるまでに成長させた。



写真 11：キャンベラの繁華街のフレッチャー・ジョーンズ店舗正面。
現在は、市民の活動スペースとなっている。

1977年にジョーンズが死去した後、会社はしだいに関税の廃止と廉価商品輸入というグローバル化の波に飲まれ、再生策を打ち出せず、2004年にすべての工場生産を停止した。しかし、ジョーンズの生涯は映画化され、賀川との関係も描かれるなど [Smith 2006]、キリスト教精神に基づいた協同組合的経営の実践例として、一時代を築いたことが歴史的評価を受けて

いる。

また、賀川は、先に論じたサルベージン・アーミーのシドニー支部でも講演をし、隊員たちと交流し、その活動に注目していた。

このように賀川は、1930年代において、オーストラリアと日本の双方で市民による関心の共有が可能な宗教的人格であったといえる。カリスマ性を有する宗教者が体現している生きた宗教を、たとえ宗教的立場や文化が異なっていたとしても、その人物への信頼ゆえに尊重するということがあり、賀川の場合、マザー・テレサ、ダライ・ラマの例にも類似した、国境を越えた広範囲な関心が寄せられていた。

また、この時代のオーストラリアは、キリスト教信者の比率がきわめて高いにせよ、もっとも多い英国国教会とカトリックは、プロテスタントである賀川とは宗派・教派が異なっている。賀川は、日本の聖フランシスと形容されるなど、宗派・教派間の違いを乗り越えて、キリスト教精神を省みることのできる存在として、オーストラリア社会に受けとめられていた。宗教・宗派が異なっても敬愛される個人は、共有宗教人格として見ることができるだろう。

ところが、太平洋戦争の開戦とダーウィン市爆撃によって、オーストラリアと賀川の関係にも亀裂が入ることになる。1942年2月19日、連合国軍の基地使用機能を奪う目的で日本海軍242機の戦闘機による爆撃が行われ、243人が死亡、市全域が甚大な被害を被った。オーストラリアでは、ダーウィンの惨事は、真珠湾攻撃と比較して語られることが通例である。

しかし、ダーウィン爆撃後も、賀川に対するオーストラリアの関心は続いている。1942年には、「平和を求める日本人の祈り」として、賀川が、世界中の平和の修復を求めて日々、日本人による祈りが唱えられていると語っていること、賀川が日本の当局に逮捕されたこと、政府の戦争挑発をサポートしたという噂が広がったにも関わらず、実際には、賀川は戦争に対するオープンな反対のせいで投獄されたいと伝える報道等がある。

1945年8月9日のBarrier Miner紙は、「原子爆弾が大きな憂慮を引き起こす」という記事で、マンハッタン計画の責任者であったオッペンハイマーの放射線被害を軽く見積もる見解とともに、日本のキリスト教のリーダーとして賀川の言葉を引用している。賀川が、東京からのラジオ放送で、原子爆弾の日本への使用が恐ろしい無慈悲さをも超える行為であると主張

したとして、詳しくその発言を紹介している。賀川のこのラジオ放送に言及する記事は、Goulburn Evening Post、Australian Associated Press、The North Western Courier、Morning Bulletin 等、新聞 5 紙に見ることができ、いずれも、賀川の意見を正面から伝える内容である。

オーストラリアの新聞報道は、戦後にも、戦時中の言動や天皇への態度に対する賛否、アメリカの核実験に対する発言など、比較的多彩な紹介記事が見られ、賀川に対する関心が続いていたことが推察できる。

記事は、没後は急減しているが、それでも、The Canberra Times が、1995 年まで、7 月 10 日の著名人の誕生日で、日本人の作家として賀川を挙げている。

筆者が、賀川とオーストラリアの関係に着目するのは、それが、宗教的信念に根ざした社会事業の力で社会問題の解決を志すことをテーマとした、国境を越えた交流の事例であるためである。さらには、アジア・太平洋における戦争回避を祈念した民間交流の事例として想起する、今日的な意義もあると考えるからである。

たとえば、戦争の記憶は、オーストラリアにおいても、けっして過去のものではない。そのことを端的に示すのが、2012 年、ダーウィン・ミリタリー博物館に設けられたダーウィン防衛体験ビルである。

歴史写真と CG を従来なかった手法で融合させるテクノロジーと被害者によるオーラルヒストリーの収集録音が、それを可能にしている。赤く燃えあがる白黒写真。今日の出来事のように再生される多様な人種、年齢、職種の体験者の声。まるで空爆当時と現代の時間が、一瞬の手続きで縫い合わされたかのようだ。この手法により、空爆のリアリティが再現され、訪問者は、それを目の当たりにする。

したがって、当時の日本とオーストラリアの複雑な関係を総合的に考察するためにも、戦争の対極として、賀川のような希少な民間交流の事例を掘り起こし、再評価することは、重要な作業であるといえよう。

ところで、協同組合という組織形態は、イギリスで 28 人のフランネル職工が 1844 年に組織したロッチデール公正先駆者組合に始まり、欧米では、ドイツのライファイゼン、スペインのモンドラゴン協同組合を始めた神父アリスメンディアリエタなど、キリスト教精神を社会に生かそうという熱意から、協同組合を組織するリーダーが現れてきた。

しかし、賀川豊彦の「信仰」を、日本の協同組合の関係者がそのまま受け継いでいくこと、共有することは困難であった。協同組合は宗教的組織ではなく、宗教の自由に基づいている NGO であり、宗教的信念が共有されていなくても、成立する組織である。しかも、戦後日本のキリスト教人口は1%前後であるからだ。

リーダーが逝去し、時間が経つにしたがって、強い宗教的信念をもって切り開いた先駆者と、その恩恵を受けつつも、同じような宗教的信念をもたない者との経験の断絶が生じる。

協同組合の先駆者の宗教的信念と、宗教的雰囲気、倫理観、創造力、柔軟性、宗教的カリスマが失われ、組織に精神的養分を供給した原点が忘却され、組織のルーツが見失われ、共有されなくなったとき、システムだけによりかかり、組織の形骸化、硬直化が起こってくる。

したがって、宗教的立場が異なっても、パイオニアの精神と実践をいかに理解し、共有するか、信仰が異なっても伝わる共有宗教文化にできるかが、自由と協同を基盤とするアソシエーションにとっては、決定的に重要になってくる。

すでに、1980年の第27回国際協同組合大会で、カナダの協同組合学者アレクサンダー・レイドローが、協同組合は、信頼の危機 (a credibility crisis)、経営の危機 (the managerial crisis) を経て、思想的危機 (an ideological crisis) に直面していると指摘しており、それ以降、自由な協同のアソシエーションをつくる根源的意味への応答が、協同組合関係者に、求められてきたといえる。

この点、賀川は、協同組合が、その仕組みだけで維持できるものとは考えていなかった。キリスト教の愛や、仏教の慈悲、儒教の仁、さらには宗教の教えを意識しない人々も生来もっている弱者への思いやりの精神などによって維持されなければ、組織は発展せず、目標は達成されないという認識をもっていた。具体的には、多く貢献した人間も、利益の分配において、貢献分を譲るという行為は、宗教的信念や利他的本能に裏打ちされていなければ可能にならないという洞察をもっていた [賀川 1963(1947) : 515-516]。

だとするならば、その宗教的な信念について、宗教的な立場が違っていても、一定の理解や敬意をもち、それに、自分なりの立場から、接近し、

同質的な結果をもたらす行為に結びつけることが必要になる。

そして、現実には、賀川のような、強い使命感、宗教的な信念をもった人物がいたのであるから、そういう人物が切り開いた社会洞察、人間洞察は、可能なかたちで継承されていくことが望ましいだろう。

そこで、信仰としての宗教ではなく、共有宗教文化としての宗教の視点が重要になってくる。

生活協同組合は、賀川豊彦という重要人物を正面に打ち出した活動はしてこなかった。しかし、彼がたんにキリスト教徒であるだけでなく、世界的に評価され、オーストラリアの社会事業と協同組合のみならず、世界の社会事業と協同組合に東洋のリーダーとして感化を与えた人物であるとして、宗教的信念をもった人物の人生、祈りと実践を、共有宗教文化として受けとめることで、その遺産を生かすことができるのではないだろうか。

2.3 メルボルン博物館による歴史的スラム地区・リトルロンの発掘調査と展示

メルボルン博物館では、都市の発達とともに形成されたリトルロン (Little Lon) と呼ばれるスラムに学術的照明を当て、往時の建物数棟と裏路地を再現するなど、本格的な展示をしている。そして、スラムの人々のために社会活動を行った英国国教会のシスター・エスター (Sister Esther 1858-1931) についてもプレートを掲げて紹介している。

先述した「ザ・メルボルン・ストーリー」は、1835-1850年「出会いの場としてのメルボルン」、1850-1880年「黄金の町」、1880-1900年「発展と破滅の都市とリトルロン」、1900-1920年「メルボルンとこの国」、1920-1945年「電気の都市」、1945-1980年「郊外の都市」の6つの時代とテーマに分けてメルボルンの多角的な姿を浮き彫りにする常設展である。リトルロンにはとりわけ大きな展示スペースが割かれ、スラムでは実際に多様な人種と職種の人々の生活があったことをメルボルンという都市の歴史の重要な一側面として、位置づけていることが注目される。



写真 12・13：メルボルン博物館のスラム地区リトルロンの展示スペース
右側に発掘された遺品、中央奥に発掘調査の解説映像、左手に住居のモデルがあり、
中に入ると路地裏と当時の生活の様子が垣間見える。住居内には、シスター・エス
ターに関する解説プレートもある。

リトルロン発掘は、ビクトリア州最大の歴史発掘調査であり、約 30 万点の発掘品が博物館に収蔵され、歴史の短いメルボルンで、発掘して長くその歴史が迎えられる他に見られない学術的にも貴重な遺構という視点も働いている。

その情熱には、奈良の古墳の発掘に近いものが感じられる。19 世紀にこの地域で実際にどのような生活が展開されていたのかを発見するために、歴史学者と考古学者が協力して仕事をした。红灯の巷やメルボルンのスラムと呼ばれていた外的印象だけの理解を越え、ほとんど文字記録がない、貧しい労働者の生き生きとした日常生活が、発掘調査によって迎えられるようになった。

タバコの吸い殻、ワインのボトル、食器類など、当時の人々が使用していた日用品がそのまま展示され、壁面には、1988 年からの発掘調査の様子や発掘研究にたずさわった研究者の証言などの動画も映しだされている。

シスター・エスターはイギリスに生まれ育ち、1884 年に英国国教会の修練者となり、1880 年代にオーストラリアのメルボルンに移住、1888 年にリトルロンのミッションハウスに住んだ。翌年に 2 名の協力者が加わり、彼女たちは、家庭、工場、病院、監獄、法廷を訪問、身を落とした少女たち

のための家や捨てられた子供たちのための家をつくり、聖なる御名の共同体（The Community of the Holy Name）を設立した。スラムの人々の看護、生活相談、教育など支援活動に携わった。

エスターは、リトルロンの生活について貴重な文字記録を遺しており、その記録もこの展示再現に役立てられている。

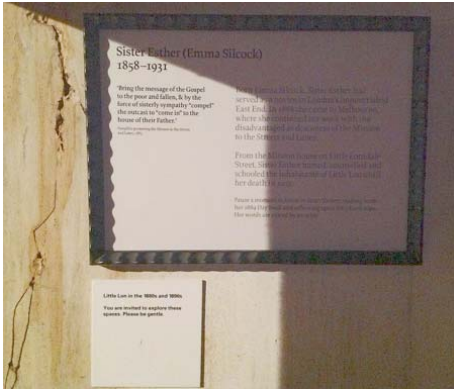


写真 14：再現住居内に掲げられているシスター・エスターのプレート

連邦政府の都市開発で 1990 年代にリトルロンは姿を消したが、その歴史は総合的な姿として学術的努力によって再現され、メルボルンの歴史の貴重な一要素として伝えられる努力がなされ、宗教的信念による支援の史実も紹介されている。

このメルボルンの展示は、たとえば、戦前のスラムであった新川の生活の様子が日本を代表する博物館で重要な一部として再現され、1909 年にスラムに住んだ賀川豊彦の宗教的信念による救済活動が紹介されるような試みといえよう。しかし、神戸市博物館では神戸に形成されていた日本最大のスラムについての本格的な展示は行われていない。

都市に住んださまざまな人の記録や記憶を人間の生活の痕跡として、大きな視点でとらえ、それを受け止め位置づけようという考え方がなければ、このような展示は成立しないだろう。

宗教の社会貢献への理解を深め、その認識を、人々の共有のものとするために、公共の博物館の果たす役割には、潜在的な可能性があり、メルボルン博物館のリトルロン展示は、それを示すものといえる。

2.4 アボリジニの人々の宗教文化

オーストラリアでは先住民アボリジニの人々の文化そのものが、共有宗教文化とならなければならないのではないだろうか。

早逝したオーストラリア先住民研究者が、1989年に聞き取りされた、ダナイヤリというアボリジニ教師の独白を紹介している[保莉 2004: 91-105]。

そこに自分たちの土地がほしいのなら
アボリジニの人々に頼むべきだった。
なぜなら、そこはアボリジニの土地だから。[同 94]

これからのことについて、話をしよう。
私たちは友達だ。
なぜなら、私たち全員がオーストラリアを所有しているのだから。
私たちひとりひとりが
白人であろうと黒人であろうと。
(中略)

なぜなら、いまでは、
私たちはオーストラリアと一緒に所有しているんだから。
私たちひとりひとりが、オーストラリアを所有する。
それでいいじゃないか。
その方がずっとうまくいく。[同 103]

アボリジニの人々にとってオーストラリアの大地そのものが聖なる地で、単なる地政学的な土地ではない。それは、すべての生き物と人間を生み出す、生命をもった総合的な存在である。こうした、アボリジニの人々の多彩な宗教観は、英語ではドリーミング (Dreaming) と総称されている。

オーストラリアの大地を鉄道で走れば、ジャレド・ダイヤモンドが述べるように、この大陸が西洋文明によっていかに搾取されてきたかが、よくわかる[ダイヤモンド 2012: 157-213]。もともといなかった牛や羊が放牧され、カンガルーの姿も鉄道周囲ではほとんど見るのがなく、一見のどこに見える牧草地も、アボリジニによって共存されてきた自然資源が、近代化によって原生林が消尽され、改変されてしまったことを示す景観が続く。

オーストラリアで近代化以前の自然を体験しようとするれば、一般の観光客は、何かのツアーに参加することになるが、紋切型のツアーが多い。現在、アボリジニ居留地区のアーネムランドを訪問して、アボリジニの人々と交流する本格的なエコ・カルチュラル・ツアーは、参加費用が平均的なツアーの約3倍はかかり、一定以上の収入と余暇が取れる者だけが利用できる。

オーストラリアの自然とアボリジニの人々、文化にふれたいという外からの訪問者との間に、多くの精神的、経済的障壁が横たわっているという印象を、筆者は受ける。

そのようななかで、アボリジニの人々が大事にしているドリーミングの宗教文化とふれあう有効なインターフェイスの一つは、アボリジナルアートであろう。もっとも、土産物屋やアートショップに置かれているアボリジナルアートは、良い物が少なく、商業主義とアボリジニの人々の精神の中間をさまよっている大量生産品が中心で、ところを純粹に打つものは少ない。アボリジニの人々の精神が生きた本物のアボリジナルアートにふれることができる場合は、メルボルンなどの一流の博物館等に限られる。この意味でも、共有宗教文化のために博物館の果たす役割は、大きいといえる。



写真 15：メルボルン博物館に展示されている、紙ではなく木の皮に描くアボリジナルアート



写真 16：メルボルン博物館。現代的に洗練されているアボリジナルアート

オーストラリア北部、ダーウィン市から約 250 キロメートル東にある世界遺産（複合遺産）・カカドゥ国立公園は、2 万年以上前に描かれた壁画が残るロックアートの宝庫である。



写真 17：カカドゥ国立公園内、ノーランジー・ロックのロックアート。

ところが、国立公園の観光拠点の小町ジャビルから直線距離にして約 5 キロメートル、車で約 10 分の距離に世界有数のウラン鉱山があることは、公園の表象からほとんど隠されてしまっている。オーストラリアは原子力

発電所をもたないが、資源国として、欧米、日本、韓国にウランを輸出している。

最初にこの地域にウラン探査が行われたのは 1944 年から 1950 年代にかけてであるといわれる。ウラン鉱山のエリアだけは国立公園に含まれていない。同鉱山では福島原子力発電所事故の後、その土地を所有する先住民が憂慮しており、2013 年 12 月に放射性汚染水の大量流出事故も起きている。

ウラン採掘の現実を表象から消し去り、国立公園の自然とロックアートやアボリジナルアートだけに心を奪われていることはできない。あるいは、それらを、バラバラに意識し、表象を区分しつつけることでは、オーストラリアの社会問題の全体像が見えてこない。その両者を心のなかに合わせて受けとめることが必要である。



写真 18・19: ウラン鉱山への入口にあるウラン生産企業 ERA (Energy Resources of Australia 1980 年設立) の看板。ウラン鉱山の様子。世界のウランの 10%を生産する世界第 4 位の企業である。

ところで、初めてこの地域にアボリジニの人々のための産業化された農地を確立しようとするキリスト教のミSSIONナリーが設立されたのは、1900 年であるという [Laurence 2000: 32]。

資源採掘者や牧畜業者たちの入植と異なり、その目的は、アボリジニの人々の福祉に貢献するためであったなかに、アボリジニの人々の宗教文化を尊重しつつ、人々の福祉に貢献しようと懸命な努力を重ねてきたミSSIONがあることも事実である。アボリジナルアートも、そうした交流のなかから、生み出されてきた側面がある。

しかし、歴史的にミッションの活動は、キリスト教と西洋式の生活様式を伝え、アボリジニの人々の生活を変化させようとする試みでもあった。筆者には研究・紹介の準備はないが、オーストラリアにおいてもミッションの功罪について様々な議論が展開されてきており、宗教 NGO の活動のあり方にとって多くの示唆を与えるものであらうと感じている。

すなわち、きわめて複合的で微妙なバランスの上に、オーストラリアの現在の多文化主義が成立しているといえる。

こうした状況を変えていくためには、アボリジニの宗教文化と今日のオーストラリアの国民、及び観光や経済をめぐる諸問題の、全体像をつかむ姿勢が欠かせないのではないだろうか。

現代のオーストラリアを見ると、その場として、一つの可能性は、公的な博物館であろう。あるいは、アボリジニの人々、西洋人や他民族の移民、観光客の人々が、相互に出会い、交流できるような、ハイコストでない新たなエコ・カルチュラル・ツアーの開発であろう。そのためには、最新の研究成果を統合し、博物館、観光、社会サービス等に生かすための総合的な視座が必要である。

共有宗教文化も、総合的なアプローチに貢献できる概念として、筆者は考えている。近代西洋に起源をもつ宗教概念をそのまま、アボリジニの宗教文化に当てはめることはできないが、アボリジニの人々の文化は広い意味での宗教性を抜きにして語るができないだろう。西洋人のキリスト教徒は、その宗教性と世界観のすべてを受け入れることは困難であるが、環境適応して数万年を生きてきたアボリジニの人々の精神性に深い関心を寄せる者も少なくない。また、サルベーション・アーミーなどキリスト教系 NGO の社会支援も、西洋化、都市化により、それまでになかったアルコール、タバコ、薬物依存症、貧困問題に悩まされるアボリジニの人々に手を差し伸べている。

そこでは、宗教的立場や、背景となる文化は異なっても、アボリジニの宗教文化や、西洋人のキリスト教における非暴力的な思想や社会貢献活動の側面が、けっして目立たなくとも、共有宗教文化の可能性として、生きているのではないだろうか。



写真 20 : カカドゥ国立公園内の小町ジャビルで遊ぶアボリジニの子供たち



写真 21 : ジャビル内にある唯一のカトリック教会。プロテスタントの合同教会と隔週で使用されている。主として、カカドゥ国立公園で働く、アボリジニ以外の人々が礼拝に参加しているが、アボリジニの人々が利用できる乗り合いトラックを運営し、クリスマスなどの行事にアボリジニの子供たちを招待するなど、相互交流を重ねる場ともなってきたことが、地域コミュニティの会報などからうかがえる。

3. 環太平洋の平和的發展と宗教の社会貢献

環太平洋の平和的發展を考えると、FTA（自由貿易協定）、EPA（経済連携協定）、TPP（環太平洋経済連携協定）をめぐる日本、中国、韓国、ア

メロカ、アセアン、オセアニア各国の駆け引きと、それに連動する軍事バランスの変化によって生じる緊張と摩擦、そして、経済・軍事活動と自然災害によって起こる環境圧力が、マクロの視点では最大の問題であろう。

環太平洋地域は、地政学的な権益のぶつかりあいで、20世紀前半にアジア・太平洋戦争を経験し、2011年3月の日本の大震災では、近代化以降築きあげてきた沿岸部のインフラストラクチャーが壊滅的被害を受け、福島原発事故を終息させる展望も、見いだせていない。

このような現状を鑑みると、少なくとも、環太平洋の諸宗教が有する共有宗教文化は、私たちに、信仰する宗教、無宗教の違いを越えて、心の豊かさや慰め、戒めの態度と未来への希望、人々の信頼の絆がつくられる端緒をもたらす重要な無形・有形の精神的、物質的資本であるととらえることが必要ではないだろうか。

宗教的立場の違いによって認識や行動が分断されているのは、マクロな危機に対して、有効な精神的メッセージを発すること、社会的なアクションを起こすことは困難になってしまう。環太平洋の諸宗教が有する精神的、物質的資本の意義と可能性を、総合的にも明らかにしていくこと、そして、それを、マクロの危機に対する対案を考察するために活用することが重要であろう。

共有宗教文化の観点からオーストラリアを見ることは、少なからぬ示唆を与える。宗教の社会貢献活動を共有宗教文化としてとらえるためには、サルベーション・アーミーの歴史と活動、メルボルン博物館のリトルロンの展示が、共有宗教人格としては賀川豊彦とオーストラリアの出会いが、そして、アボリジニの宗教文化は、文化的、宗教的、環境的、経済的共存の課題として、学び得るものが多い。

もちろん共有宗教文化だけで、環太平洋地域の平和的發展を担えるわけではないという意見もあるだろう。新技術、新しい、政治・経済的な努力の積み重ねが必要であることはいうまでもない。

視点を変えれば、神道と仏教が共存し、キリスト教文化も独自に受容してきた日本は、共有宗教文化、あるいは、潜在的な共有宗教文化の宝庫ともいえる。環太平洋の諸宗教は、宗教の違いによる無関心や壁を乗り越えて、環太平洋の人々の生活を支えるインターフェイスとしても維持され、発展していくことが求められているのではないだろうか。

宗教の社会貢献活動の意義も、そうした、共有できる宗教文化として受け入れられることで、新たな可能性を見出すものと考えたい。

参考文献

- 賀川豊彦 1963 (1938) 〈赤道を越えて、豪州に学ぶ、豪州風土記、豪州印象記、緊密を加える日豪間の貿易、南極大陸の分割問題〉「世界を私の家として」『賀川豊彦全集』第23巻、キリスト新聞社。
- 1963 (1947) 〈協同組合文化〉「新協同組合要論」『賀川豊彦全集』第11巻、キリスト新聞社。
- 五島淑子 2004 「料理本と家庭料理の歴史」「現代アボリジニの食」、小山修三「野生食の日々 狩猟採集体験記」『オーストラリア・ニュージーランド』小山修三編、世界の食文化⑦、農文協。
- 小林泉他監修 2010 『新版 オセアニアを知る事典』平凡社。
- 塩原良和 2010 『変革する多文化主義へ オーストラリアからの展望』法政大学出版局。
- ダイヤモンド、ジャレド 2012 「搾取されるオーストラリア」『文明崩壊 滅亡と存続の命運を分けるもの 下』楡井浩一訳、草思社。
- 濱田陽 2011a 「共有文明とアジア」『新文明の軸 東北アジアの均衡と調和』第3回韓中日文化国際研究集会、韓中日比較文化研究所・教保文庫電子版。
- 2011b 「共有文明 共有性にもとづく新文明の考察」『比較文明』27、比較文明学会。
- 2012 「共有文明 ともにたもつ文明のかたち」『収奪文明から環流文明へ 自然と人類が共生する文明をめざして』伊東俊太郎・染谷臣道編、東海大学出版会。
- 2013 「新しい文明を求める倫理 文明の識別力」『地球システム・倫理学会会報』第7号、地球システム・倫理学会。
- 2014 「共存のインターフェイス 共有宗教文化」『共存学2 震災後の人と文化、ゆらぐ世界』古沢広祐編、弘文堂。
- 保莉実 2004 『ラディカル・オーラル・ヒストリー オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房。
- 細川弘明 1999 「先住民族運動と環境保護の切りむすぶところ オーストラリアの事例を中心に」『環境の豊かさをもとめて 理念と運動』講座人間と環境⑩、鬼頭秀一編、昭和堂。

- モーフィ、ハワード 2003 『アボリジニ美術』松山利夫訳。
- 米沢和一郎編 2006 『人物書誌体系 賀川豊彦Ⅱ』日外アソシエーツ。
- レヴィ＝ストロース、クロード 1976 『野生の思考』大橋保夫訳。
- Chaloupka, George. 1993 *Journey in Time: The World's Longest Art Tradition: the 50,000 Year Story of the Australian Aboriginal Rock Art of Arnhem Land*. Reed Books.
- Commonwealth of Australia. 1997 *Kakadu National Park: Tour Operators Handbook*.
- Grant, Arch. 1995 *Aliens in Arnhemland*. Frontier Publishing.
- Harris, Stephen and Joy. 1998 *The Field Has Its Flowers: Nell Harris, Missionary and School Teacher, Arnhem Land 1933-1965*. Historical Society of the Northern Territory.
- Healey, Justin, ed. 2004 *Religions and Beliefs in Australia*. The Spinney Press.
- Hoatson, Dean and others. 2000 *Kakadu & Nitmiluk: A Guide to the Rocks, Landforms, Plants, Animals, Aboriginal Culture, and Human Impact*. Commonwealth of Australia.
- Hoffstaedter, Gerhard. 2011 *Religion and development: Australian Faith-Based Development Organisations*. ACFID Research in Development Series Report No.3.
- Hubbard, Graham ed. 2002 *The First XI: Winning Organisations in Australia*. John Wiley & Sons Australia.
- Laidlaw, Alexander Fraser. 1980 *Co-operatives in the Year 2000*.
- Laurence, David. 2000 *Kakadu: The Making of a National Park*. Melbourne University Press.
- Mckenzie, Maisie. 1976 *Mission to Arnhem Land*. Rigby, Adelaide.
- Topping, Helen F ed. 1936 *Kagawa in Australia, New Zealand and Hawaii*. Friends of Jesus.
- Tweedie, Penny. 1999 *Aboriginal Australians: Spirit of Arnhem Land*. New Holland Publishers.
- Oliver, Pam. 2004 *Allies, Enemies and Trading Partners: Records on Australia and the Japanese*. National Archives of Australia.
- Wallace, Kathleen. 2009 *Listen Deeply*. IAD Press.
- Price, C. J. R. 1935 *Toyohiko Kagawa: Christian Social Reformer*. the Assembly Hall Bookroom.

参考 Web

- Australian Bureau of Statistics. *Census for a Brighter Future*.
- Alderton, Elizabeth. 2013 “Religion and Belief Systems in Australia Post-1945. Catholic Education Office Sydney.”
- <http://www.ceosyd.catholic.edu.au/Parents/Religion/Documents/20130718-pres-SORReligion45toPresent.pdf>
- Hoffstaedter, Gerhard. 2011 “FBOs in Australia. Institute of Human Security,” La Trobe University.
- Melbourne Museum. “The Melbourne Story.”

<http://museumvictoria.com.au/melbournemuseum/whatson/current-exhibitions/melbournestory/>

Museum Victoria. “Video of Excavating Little Lonsdale Street.”

<http://museumvictoria.com.au/learning-federation/video-temp/excavating-little-lonsdale-street-video/video-excavating-little-lonsdale-street/>

Nixon, Sherrill. 2002 ‘*Salvation Army in Business First XI.*’ FairfaxDigital.

<http://www.smh.com.au/articles/2002/11/08/1036308483038.html>

The Salvation Army, Australia Southern Territory.

http://www.censusdata.abs.gov.au/census_services/getproduct/census/2011/quickstat/0

映像資料

Smith, Dennis K. 2006 *The Fabric of a Dream: The Fletcher Jones Story.* A Film Australia National Interest Program.

本論文は、日本学術振興会科学研究・基盤研究（B）「環太平洋における宗教NGOの国際的ネットワークに関する研究」（代表・稲場圭信 2011-2013年）により実施した現地調査（2013年3月）と、その調査で収集した資料研究に基づく。